

友の会 通信

2007.1
No.80

ASSOCIATES NEWS

THE MUSEUM OF ORIENTAL CERAMICS, OSAKA

風塵往来 8

多田富雄氏は、世界的な免疫学者として知られている。一般向けに書かれた「免疫の意味論」(青土社・一九九三)は名著の誉れが高い。イタリア美術に精通し、骨董の造詣も深い。とりわけ能に関しては自演じ、台本も書くなど玄人の域に達している。つまりこよなく芸術を愛するすぐれた科学者の標本のような方なのである。一度、面識の機会が訪れかけたが、氏の突然のご病気のため流れてしまったのが残念でならない。

最近多田氏の久々の随想に接した。〈脳の中の能面の話—鼻欠けの「深井」〉(『紫明』第一九号)である。鼻欠けの深井というまだ見ぬ能面の、写真から伝わってくる印象を綴った文章だが、それがどのような能に使われたのか、模索に摸索を重ねた足取りを克明に綴っている。「深井」とは老女の面の種で、悲しみをテーマとした演目に使われる。しかしこの鼻欠けの深井は、常の深井と何か違う。「悲しんでいるようで、突き放した諦観が支配して、涙なんかつてゆけない……この静けさは、救いなど初めから願っていない。……そこにはぞうとするほど孤独がある……」と、多田氏の眼は捉える。

「百万」「柏崎」「小袖曾我」「安達原」などと思い浮かべるが、しつくりしない。やがて名人橋岡久太郎氏が「山姥」の前シテに使つたことをようやく知った時、背中を鳥肌のようなものが走つた、という。どことなく現れる山姥の化身が着ける面、その薄氣味悪い超絶感を見据えている孤独……。そしてまた、夭折した觀世寿夫氏も一度使つたことがあると聞いた。「藤戸」の前シテ。息子を殺した武将を目の前にして、自分も同じように殺してくれ、息子を返してくれと詰め寄る母親の絶望と放心。その気迫と、それとは矛盾した無力感。このような場面こそ鼻欠け深井のかけがえのない出番であったのだと、多田氏は胸を打たれる。

脳梗塞に襲われ、声も出なくなつた多田氏が、おそらくパソコンに向つて一字一字時間をかけて打ち込んだであろうこの文章は、何ヶ月か以前に見たテレビ番組とオーバーラップする。闘病中の多田氏が新作能の台本作りに精魂を傾けるドキュメンタリードラマが、自由な姿をあえてカメラの前に曝け出して見せた勇気と使命感に、私は言ひ知れない強い感動を受け、思わず背筋を正したものだ。おそらくは、多田氏ご自身が、鼻かけの深井の老女の絶望と孤独感を味わつたことが、あつたに相違ない。それを乗り切ろうとした必死の思いがこの短い静かな隨想から伝わってくる。鼻欠けの深井の面が、人の音せぬ晩にほのかに私の夢にも現れる。

(館長 伊藤郁太郎)

展示室から

《作品解説》
蓬萊磁堆線壺(表紙)

「鉄釉陶器」の人間国宝・清水卯一は、自らの足で胎土や釉薬の原料を探し求めること基本に、独自の作風を開きました。とりわけ、滋賀県の琵琶湖畔に念願の登窯、「蓬萊窯」を築いて以降、地元の原料を用いながら様々な作風の作品を生み出しました。この作品は、琵琶湖西岸の粘りのある磁土を用いた青白磁の一種であり、清水は「蓬萊磁」と名づけています。この蓬萊磁の誕生について清水は次のように述べています。

「古書[尾形乾山『陶工必用』]にある「比良ノ山上ヨリ出シ白土」を発見したのは、好きな釣りのおかげでした。ある日、比良山系北端の山のてっぺんに白い土を見かけ、苦心して登っていったら、これが磁土でした。掘らせでもらって、精製し焼いてみると、最初のうちはパーンと割れてばかりいました。結局、強い土だったのです。強い土はいい土です。性質をなだめさえすれば素直になります。「地肌に土をのせて、指先でピーツとひっつけて線を作つてみよう」という、他人のやらない技法を実現させてくれました。(『パリ展帰国記念 古希記念 清水卯一展』(朝日新聞社、1997年))

土との出会い、格闘の末に生み出された独自の「蓬萊磁」。そこには、宋時代の青白磁に対してもひけをとらない、清水の自負心がひしひしと感じられます。



写真上
重要文化財 色絵藤棚文大皿
1700-1730年代 九州国立博物館蔵

写真下
重要文化財 色絵植木鉢岩牡丹文大皿
1690-1730年代 栗田美術館蔵

編集後記

2007年のはじまりです。みなさまは良いお正月をお過ごしになられたでしょうか。本年も、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。(S.S.)

1年の幕開けに相応しく、能のお話を掲載することができました。なんだか華やいだ心地がするとともに、引き締まるような気もして、編集していく楽しい思いがしました。

「どうして陶芸をしていますか」と韓国の留学生に質問してみたところ、「粘土を触って作品を作っていると、生きてる」と感じがします」という返事が返ってきました。陶芸をしている人たちが皆感じていることかもしれません、改めて留学生からそのような素直な言葉を聞くと、「あ、そうだったなあ」と感動させられました。なかなか言葉にして言う事もありませんが忘れてはいけない気持ちです。(C.O.)

**大阪市立東洋陶磁美術館
友の会通信 通巻第80号**
2007年1月1日発行 No.22-4(年4回)

編集・発行:大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局
〒530-0005 大阪市 北区中之島1-1-26
TEL.06-6223-0055
<http://www.moco.or.jp>
デザイン:清嶋滋+studioTWEN 印刷:岡村印刷工業株式会社

展示のおしらせ
開催中~平成19年1月28日(日)
◆ テーマ展
梅瓶—高麗と日本のかけ橋—
◆ 特集展
受贈記念 人間国宝 清水卯一の陶芸
◆ 常設展
東洋陶磁の展開
(安宅コレクション中国・韓国陶磁、日本陶磁、李秉昌コレクション韓国陶磁)
◆ 休館日:月曜日(1/8を除く)、1/9
<展示替期間>1月29日(月)~2月9日(金)
開館時間:午前9時30分~午後5時
(入館は閉館の30分まで)



蓬萊磁堆線壺
清水卯一作 昭和57-58年
高 36.8cm Acc.No.32757 (清水保孝氏寄贈)

「美術と能の響き－能サウンド・ミュージアムオブアート」

第62回講演会要旨

重要無形文化財総合指定保持者

笛 大倉流小鼓方 阿久田舜一郎師



Fig.1



Fig.2



Fig.3

今日行います「能サウンド・ミュージアムオブアート」は、美術館で芸術に関心のある方達に能の音楽である囃子に触れていただこうと毎年1、2度企画しているものです。昨年は兵庫県立美術館、一昨年は白鶴美術館で演奏会を行い、今回は大阪市立東洋陶磁美術館で開催することとなりました。

本日は、笛と鼓だけ能の世界の一端をお聞きいただきますが、本来、能の囃子は小鼓、大鼓、太鼓の打楽器が3と笛1からなっており、旋律の楽器が笛しかない、打楽器の要素が強い音楽といえます。あとは歌、能の歌を謡曲または謡といい、これを足して五人囃子となります。お難様の五人囃子は、江戸時代の宮中で能が盛んに行われていたために、今にその姿が残っているものです。能は700年前の世阿弥以前から続き、前身に伎楽、猿楽などがありました。今では能という言葉が定着していますが、能という言葉は芸能とか技という意味ですので、本来は「猿楽の能」と申します。かつては「田楽の能」、「散楽の能」があったのですが、他の能がなくなったため、「猿楽の能」が固有名詞化したのです。「猿楽の能」は、元来は滑稽な芸を得意にしたもので、現在の狂言の方が古い形に近く、現在の能は音楽を主体にした歌舞劇的なものになっています。世阿弥の頃から『源氏物語』、『平家物語』などの物語文学を主題に良い戯曲ができるようになりました。能は和歌としての七五調で綴られている謡物で、詞が美しく、七五調を謡っていくことに醍醐味があり、またそこが能樂の大切なところなのです。

大阪は町人文化の町で謡が盛んでした。今はだいぶ廃れてきましたが、まだ根強く謡の文化があります。今の能はもともと大和猿楽といいまして、大和地方で発生したものですが、大坂城の築城後、豊臣秀吉が能を愛好したことから、この地にも根付いたと思われます。室町・桃山時代の上級武士は、織田信長を初めとして多くの武将が能を愛好しています。秀吉も朝鮮出兵する頃から能を愛好するようになり、九州の陣中に能舞台を作り役者を関西から呼んで、能を行っています。信長に続いて秀吉の庇護の下では能は盛んになり、その後に政権をとった徳川もやはり能を愛好し、これを式楽としたため、武士社会で愛好されました。江戸時代に興った歌舞伎や日本舞踊は少し曲線的、女性的な動きが多いのですが、能は静かなよう直線的な動きが強く、そうしたところに武士好みの芸能の名残があると思います。

初めに「音取置鼓」と「下り端」を続けて演奏します。「音取」はその場の音を作る。「置鼓」は前置きの鼓という意味で、能に先立って演奏されるのですが、近年は省略されることが多いです。「下り端」は、仙女や歌舞の菩薩などが天上から音楽を奏しながら舞い降りてくるという、どのかなかに楽しい雰囲気ある囃子です。能では「西王母」、西王母は中国の仙女ですし、「吉野天人」、それから仙女ではないのですが「猩々」これは大酒呑みの精霊です。酔ってふらふらしているのが、楽しく舞っていることに転化されています。この場にも歌舞の菩薩が舞い降りて楽しい場を作ってくれることを願って演奏させていただきます。

《演奏》「下り端」(Fig.1)

能の調子はゆったりと感じますが、曲によっては随分変わります。大体八拍子の拍がとられ、「よお」「ほお」と掛け声をかけ、メリハリをつけて、序・破・急にリズムを作ります。日本の音楽にはみんな掛け声がありますが、能は特にこの掛け声を駆使します。今日は太鼓がありませんが、ここに太鼓が入りますと、リズミカルな調子となります。徒步感覺のリズムをうつことを能では「呪術性を持つ」といい、太鼓が入る時は、精霊、神、龍女、鬼などの非現実的な話になります。打楽器は世界的にみても呪術性が強く、神と人、精霊と人を繋ぐ祭りの場で演奏されることがあります。能の中でも「祝詞」という鼓の演奏は、陰陽の音を延々同じ調子で演奏します。また「梓」は梓弓を指し、これによって精霊を呼び出すのですが、能ではその呼び出す時に鼓が強弱、強弱と陰陽の音を打ち続け梓をあらわします。

《演奏》「梓」

梓の演奏の中に「六根清浄」などの経文の言葉が入り、催眠術にかかるような雰囲気になります。このように色々な音が出来るのが、鼓の特色です。鼓は、中央にくびれのある梓型の胴に、紐がかかる二枚の皮が繋がっています。中心にくびれがある胴は世界的に珍しいです。梓型は、伎楽や雅楽と一緒に大陸から入ってきた形だといわれ、こうした形の楽器は今も中国や韓国に残っています。日本では桜の木で作られます。木をこのような形に彫るのは高度の技術が必要となり、バランスによって面白い音色になります。鼓は中国では、高台のついた陶器を二つあわせて作ったといわれ、現在の小鼓には既に見られませんが、大鼓にはくびれの真中に少し高台の形が残されています。

今、私が持っているものは、元禄時代くらいの楽器といわれています(Fig.2)。室町時代の終わりから江戸時代の初めにかけての、能が時の権力者達に愛好された時代に、一番良い楽器ができます。やはり庇護者の経済力の下に、良い楽器ができたのだと思います。「研ぎ出し」などの手法を使った素晴らしい蒔絵が残され、我々も桃山時代から江戸時代初めの楽器を主に使っていました。室町時代頃から奈良の多武峰周辺に、胴の作者がたくさんおりました。今でも多武峰に下居という地名があります。その地の人達が良い作品を作っていました。ほかにも名作があります。内側に刻まれた鉢目といい美しい文様によても共鳴を和らげるのですが、その鉢目や木の質や姿によって、作者を区別することができます。皮は仔馬のものを用います。50年、100年と使い込むほどよく鳴るといわれます。今私のもっていますのも、多分100年くらいは使っていると思います(Fig.3)。しかし皮は打つのでしだいに痛み、ひびが入り、これを陶器と同じく貫入といいます。貫入の入るような張りのある皮が良いといわれますが、やはりひびですから、段々広がって最後に破裂てしまい、限度が200年位といわれています。私も舞台で演奏中に2、3回破裂することがあります。今日は素晴らしい音ができるなと思っていると最後の光芒を放って破裂するという場合が多いです。皮ですので天気に左右され、非常に乾燥した場所や湿った場所でも違ってきますし、空調のある部屋では、どんどん変化します。

普通、打楽器は紐とかボルトで強く締めつけられますが、鼓は左手の操作によって色々な音を出すので、皮に少

し緩みが必要なため、紐がゆるくかかることがあります。刻々と変る状況に苦労して鳴らしている小鼓なのですが、ゆるめたまではほとんど鳴りません。太鼓のようにしめて打ちますと、高く硬い音が出ます。元来は高い音、鋭い音を出すために胴がくびれているのです。柔らかい音を出すことは、この楽器にとって実は難しいことですが、能の演奏では太鼓は高い音を、小鼓は低い音を出してコントラストを深めます。ですから、小鼓は、能と共に発達した楽器といえます。それだけに操作が難しいのですが、操作できれば非常に色々な音色を奏でることができます。

能は武士が愛好した芸能ですが、武士が登場する演目もたくさんあり、それを「修羅物」と申します。源平合戦の義経や弁慶などを描いたものです。したがって現実の武士が主人の前などで舞うものを「男舞」と申し、有名な曲には「盛久」、「安宅」などがあります。「安宅」は弁慶が安宅の門を脱出した後に、山中で義経を杖でたたいたことへの詫びをいい、ひとさし舞います。弁慶は武士であり、また比叡山の僧侶もあります。当時の僧侶は仏教に専念する人であれば、芸能をして民衆を楽しませながら布教した人々もあって、色々な芸能も発達したのです。僧侶や神官が行う芸能を「遊僧」とか「延年」といって、鎌倉時代から室町時代に流行しました。当時流行ったそのような芸能をとりいれたのが、能でもあります。この時代は日本の芸能文化や宗教が非常に発達し、日本土着の文化が盛んになりました。そういう文化、芸能を一堂に取り入れて舞台化したのが能です。イメージが湧くように、「安宅」の弁慶が舞う直前のところを謡って、男舞を演奏いたします。「鳴るは瀧の水」とテーマを唱えて舞います。瀧というのは爽やかで生命力に溢れたものなのです。

《演奏》「安宅」

同じ男舞を舞うのでも場面によって異なります。弁慶は山中で雄大な自然の中で舞い、また殿中での舞、別れの舞、全て同じ男舞を演奏しても、その気分が少しずつ違って表現されなければいけないのが能です。能は写実的な表現、演奏は少なく、同じ様式を色々な曲に用いて、なつかずの世界を表現するのが、能の難しいところであり、様式の美しさとともに面白いところもあります。

やはり男舞と同じ様式なのですが、「序之舞」という最も静かな舞を演奏いたします。これは主に高貴な女性が、優美に舞う場面で演奏されることが多いものです。「野宮」という源氏物語を基にした能があります。京都嵯峨の野宮は「黒木の鳥居、小柴垣」と謡われるような簡素な神社です。娘が伊勢の斎宮としてお務めするのに同行するため、六条御息所がその野宮で潔斎精進していました。光源氏を諦めて伊勢へ行こうとしているところへ、源氏が訪れます。それを偲んで毎年の九月七日に六条御息所の魂が源氏との思い出の地へ舞い戻り、そこで昔華やかな時代を懐かしんで舞を舞うという非常に美しい能で、最ももんらしい能といわれています。したがって場面に用いられるのが、この序の舞です。「うら枯れの草葉に荒る野宮の跡なつかしきここにしも」と謡われるのですが、その美しい詞を堪能し、そこに謡われた情景を頭の中に描いていくのが能の楽しみです。御息所は葵の上との車争いで壊れてしまった牛車に乗って現れ、また帰って行きます。

《演奏》「序の舞」

今の次元の時間を超えて、別世界の時間に遊びにゆくのが能なのです。日常の時間・空間から離れるというのに心地よさがあるのです。「序の舞」さきほどの男舞とほとんど笛と鼓の手法も変わっていませんが、全く別の世界になっています。

《休憩》

「樂」は中国や大陸を主題とした能によく舞われ、舞楽や雅楽の樂などに通じるもので、月宮殿の玄宗皇帝を描いた「鶴亀」、邯鄲の枕の故事の「邯鄲」など中国の主人公が舞楽、雅楽のイメージで舞われるものが「樂」です。大陸的で伸びやかですが、のびやかな中にもののかいのいいリズムです。「盤渉樂」とあります。盤渉とは調子のことです。能の音楽は理論的には雅楽を基にしており、調子も雅楽の十二律を取り入れ、その中の盤渉調、黄鐘調を主に使っています。盤渉調は少し全体に高い調子ですので、天、月または水の流れなどの澄んだ高いイメージの標識として使われます。季節でいえば、秋冬が盤渉調となり、春夏は黄鐘調やもっと低い双調などの低い調子になります。能のプログラムでは、初めに神仙のもの、次いで修羅のもの、女性のもの、演劇的なもの、ファーネーのものの順に組みますが、早い時間に高い調子は使わず、夕方から夜になってようやく高い調子のものとなります。同じ曲でも高い調子で吹いたり、低い調子で吹いたりするわけです。盤渉調の樂。初めは黄鐘調で始まり、途中から盤渉調になります。

《演奏》「樂」

これも同じ八拍子です。

最後に早舞。これは、太鼓が入った、リズム感の良いものです。早い舞とあります。早いだけではなく少し雅なものであります。例えば光源氏や、村上天皇といった貴人の靈の舞です。または宗教的な雰囲気の中で中将姫、龍女などの解脱した女性が舞う時に用いられます。これも黄鐘調から盤渉調に転調し、演目最後の能、しかも雅やかな能に舞われることが多いものです。

《演奏》

能楽堂で能をご覧になる方が少なく、また能との出会いの場が少ないので、芸術に関心のある方が多く集まる当美術館などで、なるべく能に触れていただきたいと思い、こうした活動をさせていただいております。これを機に能をご覧いただいたら大変嬉しい存じます。

《この後、質疑応答などが行われました。》

プロフィール



久田舜一郎師 能楽大倉流小鼓方
重要無形文化財総合指定保持者。1944年生まれ。1961年大倉流絶十世故大倉長十郎師に入門し、京阪神を中心に能楽五流の舞台で活躍のほか、海外公演も多数参加。第五回伝統文化奨励賞受賞。日本能楽会会員・能楽協会大阪支部常議員・大阪能楽養成会講師などを務める。他ジャンルの音楽とのセッションなど能の現代性を追及する試みも積極的に行う。



阿久田舜子師 (藤舎敦生) 能楽森田流笛
祖父の謡曲にひかれ、謡曲・仕舞を観世流・河村隆司師に師事。能の能笛を森田流・野口傳之輔師に師事。長唄囃子の能笛・篠笛を藤舎名生師に師事。フランス・ナント市で行われたナント国際芸術祭、イタリア・パレルモの教会等、またベルリン、マドリッドの関西フォーラムの公演で演奏。能の囃子、古典音楽の分野にとどまらず、様々なジャンルとジョイントし、独自の音楽を追及している。